

夏にも多い感染性胃腸炎

感染性胃腸炎は細菌・ウイルスなどが原因で下痢・腹痛・嘔吐などの症状を起こす腸の感染症の総称です。秋から冬に多く発生しますが、1年を通じて発生します。

冬はノロウイルスやロタウイルスなどのウイルスが主な原因ですが、夏は病原性大腸菌、サルモネラ属菌、腸炎ビブリオ、カンピロバクター、黄色ブドウ球菌などの細菌によるものが多くなります。1日から数日の潜伏期間後に症状が出現し、発熱することもあります。通常は水分補給と消化の良い食事を取っていれば、数日間で自然治癒します。激しい腹痛や血便が見られる場合や、乳幼児や高齢者は早めに医療機関で受診してください。脱水症状がひどいときは点滴で水分を補う必要があります。

予防方法としては、食品を十分に加熱することです。野菜や果物など生で食べる食品は流水で十分に洗います。また調理器具を介した感染を予防するため、まな板や包丁などはよく洗い、熱湯や塩素系消毒液で消毒します。食事の前やトイレの後、調理の前後、おむつの交換後などの手洗いは感染症予防としては最も重要です。また、うがいも行いましょう。